



TITLE:

瀧本誠一氏ノ草茅危言摘義ノ解題
二就イテ

AUTHOR(S):

鈴木, 券太郎

CITATION:

鈴木, 券太郎. 瀧本誠一氏ノ草茅危言摘義ノ解題二就イテ. 經濟論叢
1916, 3(2): 102-109

ISSUE DATE:

1916-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127065>

RIGHT:

京都市帝國大學法學科大學 經濟論叢

第二號

第三卷

論說

國防稅ノ本質

でうあつぎ・ひゆーむノ經濟學說(四)

資本ノ眞概念ノ發展(二)

戰後ノ人口増加政策(二)

支那近代ノ戸口ニ就テ(二)(完)

在外正貨ト兌換券ト關係ヲ論ズ

雜錄

服部氏ノ批評國際經濟論ニ對スル向井氏ノ批評

瀧本誠一氏ノ草稿危險義解題ニ就イテ

福田博士ニ答フ

戰時利得稅ノ諸學說及實例

英吉利ノ新稅

米國ニ於ケル船舶買收法案ニ就テ

經濟雜誌第五

統計書ノ概說

らぐれー『ミール』學說ノ研究(三)

『通俗經濟文庫』ノ刊行

『經濟大辭書』ノ完成

法學博士 神戸 正雄

法學博士 福田 德三

法學博士 河上 肇

文學博士 米田 庄太郎

文學博士 内藤 虎次郎

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 鈴木 券太郎

法學博士 本庄 榮治郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 河田 嗣郎

法學博士 岸本 熊太郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 財部 靜治

商學士 大塚 金之助

法學博士 福田 德三

法學博士 神戸 正雄

(載 轉 禁)

本書の著者神惟孝は晉齋と號す、備前岡山の人なり、平生醫を業とし、兼て漢學に長し、天保年間江戸に出て下谷御玉ヶ池邊に住し、廣く文人墨客と交り、詩を善くし畫を能くせりと云ふ、或人の説に、本書は惟孝一人の筆に成れるものにあらず、煙柳坪成と云へる者、其子と與に助力加筆したるものなりと云へど、其の眞僞詳ならず

又本書ノ著作及出版年月ニ關シテ瀧本氏ハ

本書は柳條閣の活版本を底本としたるものなれども、其著作及出版年月共に明ならず、恐らくは天保年間のものなるべし

瀧本誠一氏ノ草茅危言 摘義ノ解題ニ就イテ

鈴木太郎

經濟論叢ノ讀者中ニハ日本經濟叢書ノ豫約者少カラザルベキヲ念ヒ、茲ニ經濟論叢ノ紙上ヲ藉リテ日本經濟叢書卷二十四所載ノ草茅危言摘義ノ解題ニ關スル疎漏ヲ指摘シ解題者タル瀧本誠一氏及大方博雅ノ教ヲ請ハント欲ス。

瀧本誠一氏ハ草茅危言摘義ノ解題ニ於テ本書ノ著者ニ關シテ次ノ如ク云ヘリ。

ト説カレタリ、余ハ是ヨリ如上ノ記述ニ關シテ批評ヲ加ヘ、解題ヲ比較的精確ナル基礎ノ上ニ構成センコトヲ望ムノ意ヲ致サントスルモノナリ。惟孝ガ備前岡山ノ産タルコトハ其ノ著述ニ、東備晉齋神惟孝ト自記シ又其ノ著述中ニ、我備前、吾ガ故國備前ナドト多次ニ記スル所ニ看照シテ疑ヲ容ルルノ餘地ナシ、(後文参照、惟孝、平生醫ヲ業トスト云フニ至リテハ創聞ニ屬ス、惟孝ノ所著ニ居業錄(或ハ居業餘錄)アリ、余ハ未ダ經見セザルヲ以テ之レガ内容ヲ詳ニスルコト能ハザルモ、國書解題ニ、此書ノ第四卷ニ「明著正大」ヨリ「治痘」ニ至ル四十二則云々とアルニ

看レバ、治痘ニ關シテ言說セルモノノ如ク、隨テ著者或ハ醫家ニアラザルカヲ想像セシメザルニアラザレドモ、余ノ抱有スル知識ノ範圍ニアリテハ未ダ醫家タルコトヲ肯定スル能ハズ、惟孝ノ三子惟章氏ノ如キハ、惟孝、少壯講學ノ餘暇醫書ヲ讀ミタリシコトヲ聞キシモ、京師ニ於テモ江戸ニ於テモ醫ヲ業トシタリシコト嘗テ之レナシト言明セリ、平生醫ヲ業トスト云フハ蓋虛構歟、瀧本氏ハ惟孝ガ天保年間江戸ニ出デシモノノ如ク記スルモ、惟孝ハ其頃京師ニ居リシ事實ヲ遺忘セルナリ。摘義ノ序（世ニ傳ハル寫本ニ序アリ）ニ、「天保辛丑仲冬念三日晉齋神惟孝書于平安不如學齋」トアリ、又大學述義序ニ、「天保癸卯孟春念八日東備神惟孝書于平安不如學齋」トアリ、皆以テ天保年間ノ在洛ヲ證明スベシ、摘義ノ「學校之事」ノ中ニ、天保十年某公ニ奉ル學校ノ議アリ、京師學校ノ廢ヲ慨シテ其ノ復興ヲ勸ムルノ文ナリ、某公ハ蓋日野公ヲ謂フ歟、議ノ中、「某年三十一且決然來ト居於京師」トアリ、又摘義「百官公卿之事」ノ中、

「余ガ家禁垣ニ接ス故ニ常々縉紳ニ交ルコト日トシテ是ナキハナシ」トアリ、瀧本氏悉ク之ヲ看道ガサレタルガ如シ、惟孝ガ京師ノ儒家タリシコトハ、嘉永版ノ平安人物志中儒家ノ部ニ「神惟孝字伯友號晉齋一條新町西神讓助」トアルニ依リテモ徵セラアルモノ、中原章達、岩本美親、麻田公嶽、河本綽、宮原龍、須藤丞、野口公麟、神山至明、池内時、貫名苞、琴希聲、清田裕、松永昌國、中島規等ナリ、惟孝ガ天保元年庚寅決然トシテ郷國ヲ辭シ上洛シタリシ理由ニ至リテハ明カナラザルモ、京師ニ在リテ不如學齋ヲ開設シ子弟ヲ提擲シタリシハ天保元年ヨリ弘化三年秋ニ至ル間ナリトス。

余ハ初メ惟孝ノ江戸ニ遷リシコトヲ疑ヒシモノナルモ、後直ニ其ノ記憶違ヒナルコトヲ發見セリ、惟孝ハ弘化三年丙午ノ秋、家族ヲ携ヘ始メテ江戸ニ遷リシモノナリ、（後文參照）、惟孝ノ子惟德ノ自記セル米庵先生略傳ノ附言ニモ此事ヲ記セリ、惟孝東下ノ時、齡四十七ナリ、惟孝ノ

友市河米庵ノ嫡孫三陽氏ノ傳聞ニ依レバ惟孝下谷御徒町ニ居住シタリシト云フ、下谷御玉ヶ池(御玉池ハ神田ナリキ)住居ハ蓋訛傳ナラン、惟孝ガ米庵ト始メテ交リシハ京師ノ地ニアリ。小山林堂書畫文房圖錄ノ跋ハ小竹及惟孝ノ筆ニ成ル、惟孝ノ跋言(嘉永紀元除月ノ作)ニ、「天保間始識翁於日野相公坐」トアリ、惟德ノ自記亦惟孝ガ京師ニアリテ米庵ト交盟セシコトヲ云ヘリ、跋言中ニアル日野相公トハ蓋大納言日野資愛號南洞ニシテ當時學者文人ノ保護者タリ、山陽、得齋、隨齋其他學者文人、前後公ヲ圍繞シテ其ノ眷顧ヲ求メ、聲望甚ダ隆ナリキ、瀧本氏ハ當時文人墨客ノ栖處ト知ラレタリシ御玉ヶ池ヲ以テ惟孝ノ住所ト想定シタルヨリシテ亦廣ク文人墨客ト往來シタルモノノ如ク信ゼラル、ガ如キモ、實ハ餘リ廣ク文人墨客ト交ハラザリシナルベシ、惟孝ハ既ニ青山侯ノ江戸詰抱儒者トシテ待遇セラレ且其人トナリ謹嚴ナリケレバ廣ク文人墨客ノ間ニ周旋スルヲ喜バザリシナラント余ハ想像ス、當時ノ文人墨客ノ番附面ニモ惟孝ノ

名現ハレ居ラザルガ如キヲ看テモ、其ノ書畫會ナドニ顔ヲ出サザリシコトヲ證スベキ歟、但ダ米庵ト親シカリシハ事實ニシテ、米庵ハ其子三鼎(得庵)、三兼(萬庵)ヲ惟孝ノ門ニ入レシメ安ジテ其ノ鞭撻ヲ受ケシメタリ、米庵、詩集又ハ圖錄ヲ刊スルニ方リテハ屢々惟孝ノ序跋、批評ヲ請ヒタリ、米庵先生百古ニ、筒井鸞溪、佐藤一齋ノ題言ト共ニ惟孝ノ叙アリ、嘉永己酉重陽後三日ノ作ナリ、百古ノ末尾ニ「庚戌孟春梅花半綻筆硯皆帶香齋孝拜識」トアリ、百古ノ全部ニ涉リテ惟孝ノ朱批アリ、百古ハ米庵ノ孫三鼎及惟德ノ輯校ニ係ル所ナリ、米庵先生百律ニハ小竹及惟孝ノ朱批アリ、圖錄ノ跋言ハ惟孝ノ筆ニ成ルコト前叙スル如シ、跋言中ニ「來徵餘言」トアリ、又百古ノ叙ニ、「携來見示且徵之序」トアルニ考フレバ米庵ガ傾倒ノ狀窺フベシ。瀧本氏ガ或人ノ説トシテ紹介セラルル所ノ「本書ハ惟孝一人ノ筆ニ成レルモノニアラズ、烟柳坪成ト云ヘル者其子ト與ニ助力加筆シタルモノ」云々ハ瀧本氏亦其ノ眞僞詳カナラズト評シ

居ル程ナルヲ以テ此點ヲ剔抉センコトハ無遠慮ナルニ似タレドモ、而カモ瀧本氏ガ或人ノ説ヲ抱懷セラル、ハ久キ前ヨリノコトナレバ余ハ敢テ立入リテ所見ヲ吐露スルノ自由ヲ請ハント欲スルナリ。

摘義ノ末尾ニ於ケル惟孝ノ自記（瀧本氏ノ底本トセラレタル柳條閣版ニハ此ノ自記ナシ）ニ據レバ、惟孝初メ草茅危言ヲ議スルノ意ナカリシモ、其友烟象卿、一日此書ヲ携ヘ來リテ惟孝ニ示ス、惟孝受ケテ之ヲ讀ムニ、竹山ノ論大ニ自説ト異リ且其利ヲ講ジ本ヲ外ニスルノ議アルヲ看取シ是レ世ヲ惑ハシ民ヲ誣フルノ害淺少ナラジト憤慨シ、乃チ筆ヲ援キテ其ノ大義ニ係ルモノ二三ヲ議シタリ、篇成ルニ及デ之ヲ象卿ニ示ス、象卿之ヲ從憑ス、是ニ於テ其ノ原書ノ意趣ヲ摘采シ、附スルニ自案ヲ以テシ、覽ル者ノ參考ニ便ナラシメタルモノナリ、瀧本氏ノ所謂或人ノ説ハ此ノ自記中ノ關係ヲ訛傳シタルモノナラン、摘義ハ實ニ惟孝一人ノ手ニ成リタルモノニシテ他人ノ助力加筆ヲ俟タザリシモノナル

コト其ノ自記ニ依リテ安全ニ證明セラルベシ、而シテ草茅危言ノ携來者ニシテ且批評ノ從憑者タル烟象卿ハ瀧本氏ノ紹介セル烟柳坪成ニ當ルニ似タリ烟柳坪成トハ狂歌師メキタル名稱ニシテ惟孝ノ友トシテ不似合ナルモノナレバ、余ハ初メハ之ヲ商量ノ外ニ置キシモ、強テ此ノ名稱ニ注目シツツアリシニ、端ナク烟柳ノ烟ハ烟ニシテ柳坪ハ即チ柳平（或ハ柳坪トモ自カラ書キシヤモ知レズ）ナルコトヲ解シ得タリ、想フニ烟柳坪成ハ烟柳平ナルベシ、烟柳平ノ事ハ長戸讓所著ノ得齋詩文鈔ニ、「同ニ海屋翁及池内陶所ニ聚ニ於烟柳平宅、烟氏先世叙ニ法眼、京洛名家、且多貯ニ古書畫、」ト前書セル賦アリ、是ニ依テ考フルニ、柳平ハ柳泰（鑒定便覽ニ柳恭トアル者）ノ子ナルガ如シ、柳泰ハ維禎（或ハ惟禎）號橘洲其人ニシテ文政庚寅（天保元年庚寅）再刻ノ平安人物志ニ、室町出水北ニ居住ト錄サレ、海内醫林傳ニハ、室町、内科、號橘洲、善詩及書ト錄サレタルモノナリ、文政十三年八月製ノ儒者大角力ト稱スル一覽ニ、勸進元、貫名海屋、烟橘洲

ト並ベラレアルモノ是レナリ、柳泰ハ法眼ニ叙セラレ、醫ヲ以テ大ニ行ハレ、天保三年歿シタルト云フ、柳泰ノ子蓋柳平ニシテ字ヲ象卿ト云ヒシモノニアラザル歟、柳泰ノ先ハ柳啓(或ハ柳啓)字明卿ト云ヒ、御醫トナリテ法眼ニ叙セラレタリ、柳啓ノ字ヨリ推シテ傳統ノモノ或ハ象卿ト字セシ歟、米庵ノ知人ニ畑成文ト云フ者アリシ由ナルガ、是亦柳泰若クハ柳平ノ一族ニシテ惟孝トモ相識ニアラザリシ歟、徐ロニ後考ヲ期セントス、若夫瀧本氏ガ摘義著作及出版ノ年月共ニ明ナラズ、恐ラクハ天保年間ノモノナルベシトセルハ稍々當レル臆定ニシテ、其ノ著作ガ天保十二年五月中旬ニ朔マリ、八月下旬ニ脱稿セルコト惟孝ノ自記ニ依リテ已ニ明白ナリ、但ダ柳條閣ガ之ヲ出版シタリシ年月未詳ナルノミ。

瀧本氏ガ惟孝ノ天保ノ末、平安不如學齋ニ於テ大學述義ヲ著刊シタリシコトヲ解題中ニ明記セラレサリシハ余ノ遺憾トスル所ナリ、大學述義ハ一小冊子ナリト雖モ惟孝ノ識見ヲ窺フベキ著

述ニ屬スレバナリ、惟孝ハ此外ニ、隨筆(居業餘錄歟)及正統論三卷ヲ著作シタリシコトヲ摘義ノ中ニ自カラ言說シ居レドモ余未ダ覽ルニ至ラズ、惟孝ガ大學述義序ノ附言ニ於テ、「吾家、學奉程朱、自祖府君始而孝素從事于此、是以學終始子朱子、而景慕其人、然自少小習業時、竊疑河洛大極及大學錯簡傳說、而鬱畜胸隔者于茲三十年猶一日矣、故今從戴本、而錯私說以藏之於家而已」ト提叙セル所ヲ考フレバ、其ノ凡儒ニアラザルコトヲ知ルベシ、大學述義ニ於テ「生財有大道」云々ヲ講ズルヤ、「雖謂財者末也、然家國天下而財乏則用不可爲也、故財用之方亦不可缺也、然貨財者天下之所同欲也、故貨財亦有大道也、此無他絜矩而行之也、凡天下之貨財、生之者多而食之者寡則穀常足而無飢餓之憂、器用財賄亦然、爲之力而用之者儉則國用常足、物無騰價之慮、如此而貨財無悖出之患、上下常有贏餘、此之謂大道」ト說ク、亦一見解ヲ立ツト謂フベシ、長戸讓ガ惟孝ヲ梅辻春樵ノ宅ニ初

見シ、後其ノ門戸ヲ敲キテ餘情ヲ盡シ、賦シテ贈ル所ノ詩ノ中ニ、「著述常營身後業、紛華寧慕眼前榮、飲君獨負堂々氣、不似京城軟媚生」トアリ、亦以テ惟孝ノ風格ヲ推測スベシ。

余ハ惟孝ガ其ノ家族ヲ携ヘテ弘化三年秋江戸ニ遷リシ事情ヲ探究シタルニ、ソハ惟孝ガ篠山ノ青山侯ニ聘セラレ江戸勤務トナリシニ由ルコトヲ發見シタリ、國書解題ノ中居業錄及草茅危言摘義解題ニ於テ、丹波篠山藩ノ儒者トセルハ據ル所アリト謂フベシ、但ダ摘義解題ニ於テ、讓齋ト號ストセルハ晉齋ト號スト爲スベキヲ誤寫シタルモノナラン、篠山藩御家人由緒書（青山子爵家令鏐原貞明氏及私立鳳鳴義塾長園田定太郎氏ノ報告ニ據ル）ニ次ノ如キモノアリ。

元京都西洞院一條下ル町住浪人儒者

本國信濃生國備前

神 讓助惟孝

二十人扶持

一、右弘化三丙午年六月六日御儒者被召出御給人被仰付御擬作二十人扶持被下置別段書物料銀十枚被下勝手次第出府被仰付且御扶持方引米無之旨達せらる

一、弘化三丙午年九月十日去月二十六日京都表發足道中十四

雜錄 瀧本誠一氏ノ草茅危言摘義ノ解題ニ就イテ

日振にて無漕家内召連今夕到着仕云云（按ズルニ江戸上屋敷着任ノ事ナリ）

一、同四年正月十九日文學師範被仰付學校之儀差配致し御家人末々之者に至迄專教示可仕候兼て頭取教導方之者被仰付置候間教示取立方之儀申談相勤可申候別段俸三郎儀學文出精仕候ニ付學校教導方御雇被仰付往々學業相成候様他所執行等此上無懈意出精爲仕可申候依之執行扶持二人扶持被下之若殿様御用も同様ニ可被心得候右御側御用人を以申達之

一、嘉永元年四月七日俸三郎儀當年十五歳被成學問爲修行佐藤捨藏様へ寄宿願之通被仰付是迄教導方御雇相勤候ニ付二人扶持被下置候處一人扶持御加へ三人扶持被下之

一、同六年六月九日此度相州浦賀表へ異國船渡來之處云云

一、同七年正月二十一日此度浦賀表へ異國船渡來之處云云

一、安政三丙辰年十二月晦日病氣ニ付願之通隠居被仰付之

一、慶應二丙寅年十一月十四日病死

讓助惟孝子

神 斧三郎

一、嘉永四年十二月三日被召出御擬作米八石二人扶持被下置御次詰 若殿様御文學御相手被仰付

（此間浦賀表云々數項アリ、省略ス）

一、安政五年五月二十三日家督之御書出被下之

一、萬延元年八月四日向後殿中月並講釋并ニ御中屋敷講堂講釋被仰付 尤御上屋敷講堂講釋是迄之通御中屋敷へは毎月三度宛罷出可申旨仰付之

第三卷（第二號二五五） 一〇七

一、文久元辛酉年五月十九日學業も相應に仕候に付講堂學頭見習被仰付之

一、元治元甲子年三月十九日追々文學上達ニ付書物料年々銀十枚被下之

一、慶應三丁卯年四月二十七日未男子無之候ニ付差急養子可仕年齡には無之候へども家業も有之候に付弟猷五郎儀當卯

二拾二歳罷成候ニ付此者養子に仕度旨願之通被爲屈聞召同年六月二十一日西洋學英佛之内條業被仰付一ヶ月爲雜用金三步被下之

一、同年八月十九日林大學頭様より御呼出ニ付御留守居亦見爲右衛門同道にて罷出候處御書付を以御達有之候段申出之

神 斧三郎

此度文學之儀厚き御趣意も有之候ニ付其方儀年來引立方出精之趣相聞候間猶又引立方格別行届候様可致候

右平岡丹波守殿に申上置此段申渡候

右御達ニ付而ハ

公邊に掛り候動向之儀入念可相勤旨申達之

一、同四戊辰年八月九日御用も有之旁篠山表の家族召連引越被仰付(案、此命アリシニ拘ハラズ惟德ハ篠山ニ趣カザリシト云フ)

一、明治己巳年三月十四日東京城辦事御役所に御呼出に付公用人亦見篠太郎罷出候處神斧三郎御雇被仰付候間出仕可申付旨權辦事平松甲斐權介御達書御渡有之候間可得其

意旨猶委細之儀公用人に可承合旨相達之翌十五日東京城に公用人同道罷出候處於傳達所辨事久杉監物殿左之通被相達御書付御渡有之

今般被 召出行政官の奉仕被仰付候段御沙汰ニ候

神 斧三郎

筆生申付候事

三月 行政官

一、同月十九日

朝廷に奉仕被仰付候ニ付八等官下賜候

宮中宿直被仰付依而從明二十日初宿申付

其餘は班次を以可參仕事石之通蒙 朝命候旨届出之

一、明治三庚午年二月二十四日藩制改革ニ付更ニ給祿十七石

被下置之

一、同年四月二十三日官邊在任中には候へども篠山に引越被令置候ニ付俸祿五郎家族召連支度次第篠山に引越可申

候但其方家族之儀は在任中ニ付此表に差置候儀は可爲勝手候諸渡物等之儀は於篠山相渡候儀と心得得旨申達之

一、同年閏十月九日屋敷地被下之

(備考) 養子猷五郎(後名惟尊)ハ明治三年十月東京ヨリ家族ナ件ヒ篠山ニ著シ、藩校ニ於テ句讀師ナ命ゼラレタリシガ、廢藩後出京シタリ

惟孝ノ子惟德、幼名斧三郎ハ天保五年京師ニ生レ、弘化三年、齡十三ノ時父ニ伴ハレ江戸ニ遷

リ、同四年米庵ノ門ニ入りテ學ブ、米庵晚年ノ弟子ナリ、嘉永元年佐藤一齋ノ塾ニ入ル、履堂又秋洞ト號ス、篠山藩ニ召出サレタル始末叙上ノ如シ、安政二乙卯ノ歲、惟德、青山侯ニ扈從シテ篠山ニ赴カントスルヤ米庵(時ニ齡七十七)始メ蓮庵、遂庵、修齋、香雪、松堂、雲洞等ノ諸友送別ノ書畫アリ、一卷ヲ成セリ。惟德ハ篠山ニ滞留スルコト旬日ニシテ江戸ニ還レリ、維新後行政官ニ出仕セリ、後、私立成城學校(或ハ陸軍幼年學校ニモ勤務セリト云フ)漢文教師トナリ、旁ラ雜誌文武叢誌ノ爲メニ歴史人物ノ評傳等ヲ執筆シタリ、後浦賀ノ某學校ニ聘セラレシガ、宿痼發シテ復タ起タズ、明治三十七年八月六日ヲ以テ終ニ歿セリ、戒名、嚴裕院溫良惟德居士トアリ、誠ニ其人トナリ溫良篤實ニシテ而カモ大義ニ通ズ、故ニ人ノ畏敬ヲ受ケタリ、當時成城學校ニ學ビテ惟德ノ教ヲ蒙リタル者ノ談ニ、其ノ身長高カラズ、頭蓋ノ發達大ニシテ顔色淺黒ナリ、登校毎ニフロツクコートヲ着シタルモ而カモ身邊ヲ飾ラズ、輕視セラレ易キ當時

ノ漢學先生中衆生ノ尊敬ヲ受ケタル者獨リ此人ナリシト云フ、其ノ趣味トシテハ文ヲ屬スルノ外篆刻ヲ能クセリ、惟德ノ維新後ニ於ケル住居ハ赤阪區青山北町一丁目、四谷區舟町三十三番地、同區北伊賀町十五番地等ニ移動セリ。

惟孝、惟德ノ墓ハ青山玉窓寺ニ在リ、晉齋神先生墓トアルモノ即チ惟孝ノ墓ナリ、墓誌ニ「諱惟孝字伯友通稱讓助以寛政十二年十二月二十五日生于備前岡山慶應二年十一月十三日享年六十七 釋號仙峰道遊居士 不肖男惟德

惟祺 惟章 建」トアリ、惟孝死去ノ日、篠山藩御家人由緒書ニハ十一月十四日トアリテ墓誌ト一日相違シ居ルガ、是レハ墓誌ノ十一月十三日トアルヲ實際死去ノ日トスベキ歟、惟祺ハ幼名鎌四郎ト云ヒ、惟章ハ幼名鉄五郎ト云フ惟章、後出デテ細野家ヲ嗣グ、惟孝ハ此外ニ女兒ヲ有シタリキ、こまト云フ、惟祺ハ既ニ歿シ惟章及こまハ俱ニ現ニ存ス。